

【 研 究 主 題 】

課題を解決するために必要な資質・能力を育成する授業に関する研究 －主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して－

現在の児童生徒が成人して活躍する頃の社会は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境が大きく変化し、児童生徒が就くことになる職業の在り方についても、現在とは様変わりすることになると指摘されている。そのような社会において直面する課題は、複雑であったり未知のものであったりし、答えが多様で正答の定まらないものであることが多いと言われている。

このような社会の変化を踏まえて行われた文部科学大臣から中央教育審議会（以下「中教審」という。）への諮問においても、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究していくことができる児童生徒を育成するための学習指導の在り方についての検討が求められている（資料1-1）。

そこで、本研究では、課題を解決するために必要な資質・能力とはどのようなものを明確にした上で、そのような資質・能力を育成するために、授業において解決に取り組ませるべき課題はどうあるべきか、児童生徒が主体的・協

働的に学ぶためにはどのような工夫が効果的かについて、学習活動や評価の在り方から明らかにしようと、平成27年度から2年間にわたって取り組んできた。

中教審による「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下「答申」という。）では、育成を目指す資質・能力として、学校教育法に規定された、いわゆる「学力の三要素」を踏まえた「資質・能力の三つの柱」が示された。併せて、このような資質・能力を育成するために「主体的・対話的で深い学び」（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善が示された（資料1-2）。

本研究は、このような教育の動向と方向性を同じくするものであり、未来の創り手となる児童生徒に日々の授業を通して課題を解決するために必要な資質・能力を育成することを目指したものである。各学校における授業改善の一助となれば幸いである。

初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問） 平成26年11月20日

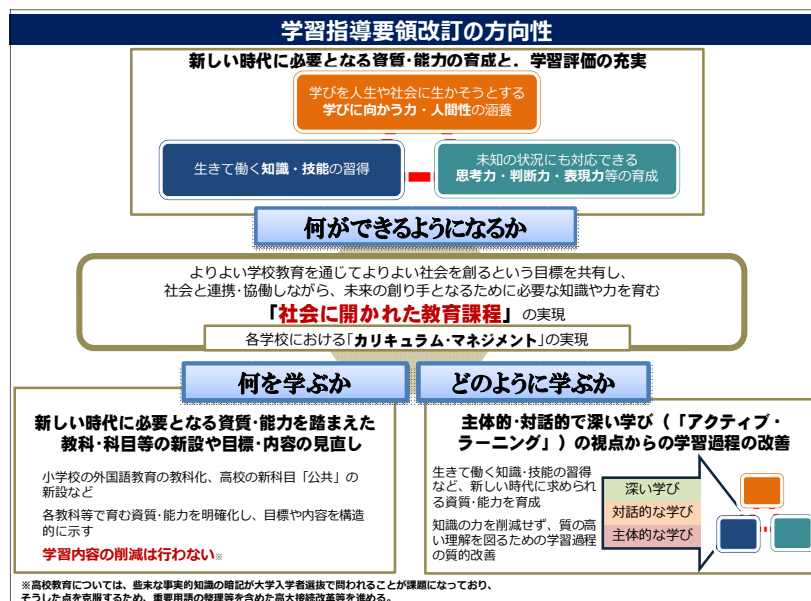
（前略）

これらの取組に共通しているのは、ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要であるという視点です。

そのために必要な力を子供たちに育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。

（下線は筆者による）

資料1-2 学習指導要領改訂の方向性



第1章 研究主題に関する基本的な考え方

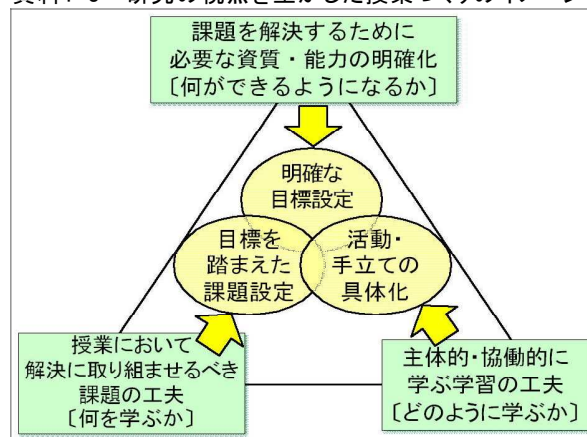
1 研究の目的

本研究の目的は、時代背景や教育の動向を踏まえ、課題を解決するために必要な資質・能力を授業を通して育成するために、児童生徒が主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して、授業改善に資することにある。そこで、まずは、児童生徒に育成したい課題を解決するために必要な資質・能力とはどのようなものかを整理し、明確にする。次に、そのような資質・能力を育成するためには、授業においてどのような課題に取り組ませるべきか、課題設定の考え方や工夫の視点について明らかにする。そして、児童生徒が課題解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習の在り方について、考え方や工夫の視点を明らかにする。

このような視点から研究を進めることは、授業づくりの過程において、育成したい資質・能力を踏まえた明確な目標設定や、目標を踏まえた課題設定、学習活動や教師の手立ての具体化につながる事が期待できると考える（資料1-3）。

なお、本研究は、小・中・高等学校の国語科、社会・地理歴史・公民科、算数・数学科、理科、外国語活動・外国語科を対象としたものである。また、検証授業の実施に当たっては、現行学習指導要領に基づいて評価の観点を設定した。

資料1-3 研究の視点を生かした授業づくりのイメージ



2 本県の教員の意識や取組に関する実態

(1) 調査の目的

本県の教員は、児童生徒の資質・能力の育成にどのような課題を感じているか、また、授業で取り組ませる学習課題や学習活動に対してどのような意識をもって取り組んでいるかについて、実態を明らかにする。

(2) 調査の概要

ア 調査内容

- (ア) 児童生徒に身に付けさせたい力について
- (イ) 授業で取り組ませる学習課題について
- (ウ) 授業で取り組ませる学習活動について

イ 調査対象

研究協力員、短期研修受講者、研究提携校教員（小学校271人、中学校158人、高等学校65人）

ウ 調査期間及び調査方法

平成27年7月から12月において、質問紙調査法（選択式、一部記述）にて実施

(3) 調査の結果と考察

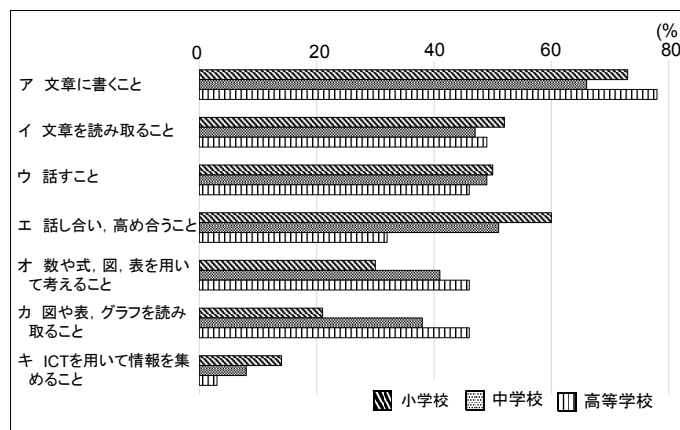
ア 児童生徒に身に付けさせたい力について

- (ア) 課題解決に必要な基礎的な力について

次の各項目は、児童生徒に身に付けさせたいと考えられる基礎的な力の主なものです。これらのうち、あなたが現在授業を担当している児童生徒について、不十分だと感じているものを三つ選んでください。

どの校種においても調べたことや考えたことを文章に書いたり話したりすることや文章を読み取ることが不十分であり、特に、小、中学校では、話し合いを通して考えを高め合うことが不十分だと感じている教員が多いことが分かった（資料1-4）。このような傾向は、平成27年度全国学力・学習状況調査の分析でも指摘されており、児童生徒の思考・判断・表現を促す学習活動の工夫・改善が必要である。

資料1-4 不十分だと感じる基礎的な力

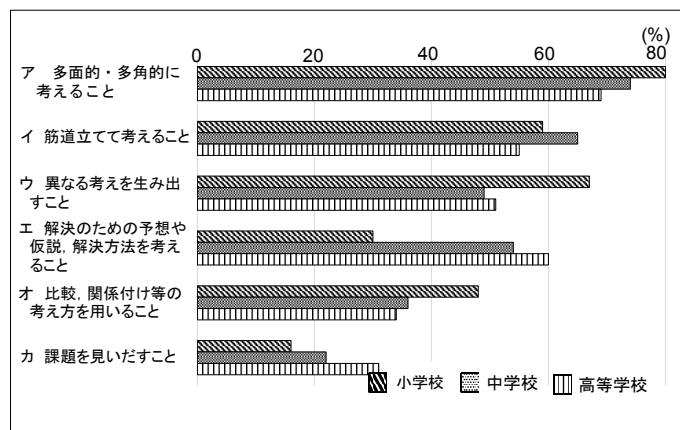


(イ) 課題解決において発揮される思考力について

次の各項目は、児童生徒に身に付けさせたいと考えられる思考力の主なものです。これらのうち、あなたが現在授業を担当している児童生徒について、不十分だと感じているものを三つ選んでください。

どの校種においても、多面的・多角的に考えることや筋道立てて考えることが不十分であり、特に、小学校では異なる考えを生み出すことが、中、高等学校では解決のための予想や仮説、解決方法を考えることが不十分だと感じている教員が多いことが分かった（資料1-5）。このような力は課題解決的な学習を通して高まると考えられるものであり、一層の充実を図る必要がある。

資料1-5 不十分だと感じる思考力

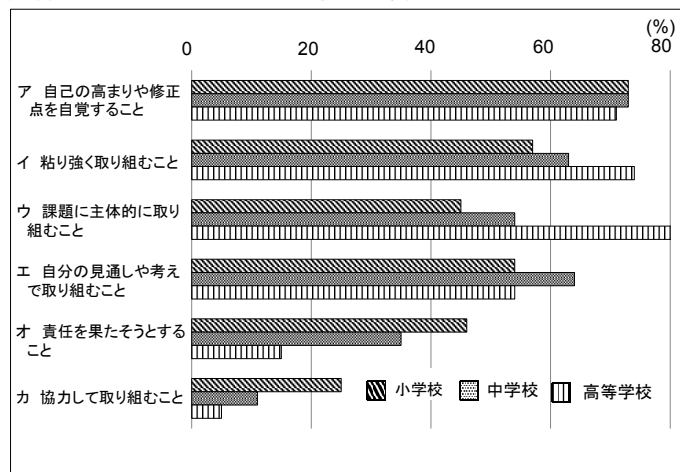


(ウ) 課題解決における学習態度について

次の各項目は、児童生徒に身に付けさせたいと考えられる学習態度の主なものです。これらのうち、あなたが現在授業を担当している児童生徒について不十分だと感じているものを三つ選んでください。

どの校種においても、自己の高まりや修正点を自覚することや粘り強く取り組むこと、自分の見通しや考えで取り組むことが不十分であり、特に、高等学校では課題に主体的に取り組むことが不十分だと感じている教員が多いことが分かった（資料1-6）。このことから、児童生徒が課題を自分に関係があることと受け止め、粘り強く主体的に取り組めるように工夫するとともに、見通しや振り返りを促す活動の充実を図る必要がある。

資料1-6 不十分だと感じる学習態度

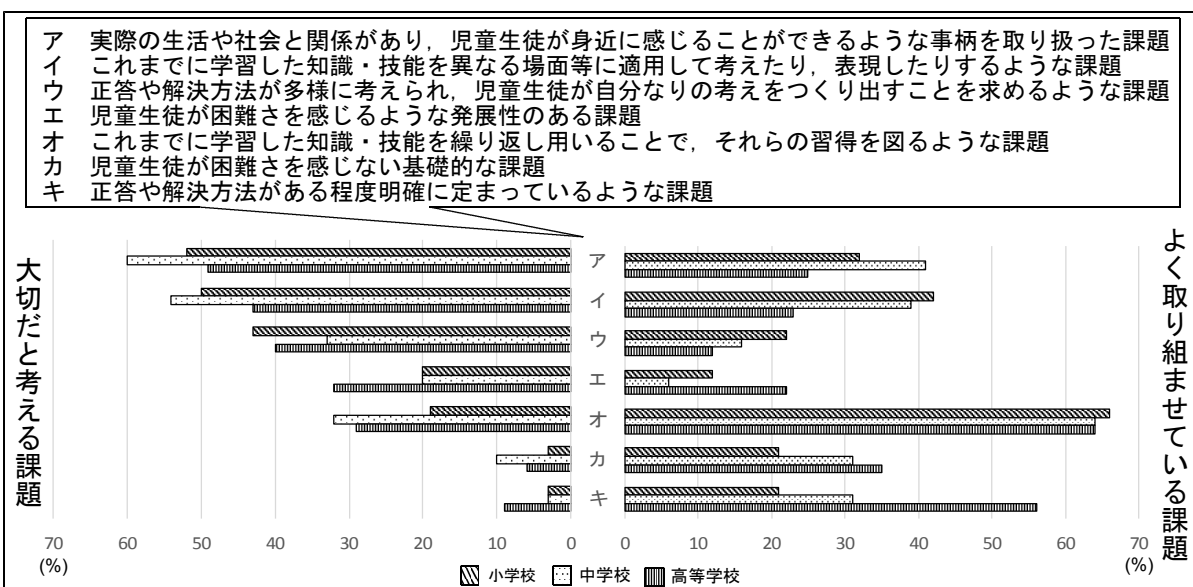


イ 授業で取り組ませる学習課題について

児童生徒の学習意欲を高め、主体的な思考や表現を促すためには、どのような課題に取り組ませることが大切だと考えますか。また、あなたがかねての授業においてよく取り組ませている課題は、どのようなものが多いですか。それぞれ三つ選んでください。

どの校種においても、ア実生活や実社会との関連を意識させる課題や、イ習得した知識・技能の活用を促す課題等が大切だと考えているが、かねての授業ではそのような課題にはあまり取り組ませておらず、オ知識・技能を反復することによって習得させる課題やキ正答や解法がある程度定まっている課題等に取り組ませている教員が多いことが分かった（資料1-7）。このことから、次世代を担う児童生徒に求められる課題解決に必要な資質・能力とはどのようなものか、また、それらを育成するためにはどのような課題に取り組ませるべきか見つめ直すとともに、単元の指導計画への適切な位置付けや効果について検討する必要がある。

資料1-7 大切だと考える課題とよく取り組ませている課題

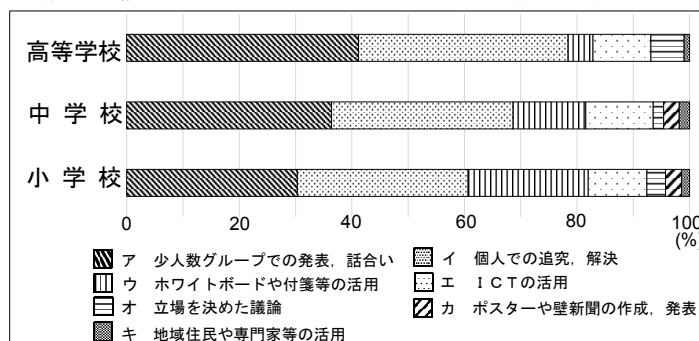


ウ 授業で取り組ませる学習活動について

あなたが、かねての授業において児童生徒によく取り組ませている学習活動は、どのようなものが多いですか。三つ選んでください。

どの校種においても、ア少人数グループで発表し合ったり、話し合ったりする学習活動やイ個人で追究し、解決を図る学習活動に取り組ませている教員が多いが、ウホワイトボードや付箋等の活用及び、エICTの活用、オ立場を決めて議論する活動の取組は少ないことが分かった（資料1-8）。このことから、

資料1-8 授業においてよく取り組ませている学習活動



児童生徒がグループや個人で思考・判断・表現する学習活動を設定してはいるものの、どのようにして思考させたり表現させたりするのか、教師の手立てが具体化されていない場合があることがうかがえる。そこで、児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的であるか明らかにする必要がある。

3 課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか

(1) 学校教育法に基づく育成したい資質・能力

学校教育法第30条第2項が定める学校教育において重視すべき学力の三要素は「基礎的・基本的な知識・技能」,「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力（以下,「思考力・判断力・表現力等」）」,「主体的に学習に取り組む態度」である（資料1-9）。これを踏まえ,中教審答申においては,育成を目指す資質・能力の三つの柱が資料1-10のように示されている。当センターでは,この三つの柱を課題を解決するために必要な資質・能力と捉えている。

この三つの柱を児童生徒が授業を通して身に付けていくイメージを自動車为例に模式図で示すと,資料1-11のように捉えることができると考える。「基礎的・基本的な知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」は,車の両輪として捉え,バランスよく育成すべきである。「主体的に学習に取り組む態度」は,課題解決の原動力となるエンジンとして捉え,情意面の育成も重視すべきである。その際,児童生徒が生きていくこれからの社会の様相を考慮すると,課題解決に対して主体的に粘り強く,責任をもって取り組む態度や,考えの多様性を尊重しながら互いのよさを生かして協働する力やコミュニケーションを行う力,社会に参画したり環境へ配慮したりする姿勢がますます重要である。また,このような態度等の育成に当たっては,児童生徒自らが課題解決への見通しをもったり,解決の過程や結果を振り返ったりすることを通して,自己の高まりや修正点を自覚することが重要である。このような自覚は,課題解決への方向付けを図ることにつながることから,ハンドルの役割を果たすものと言える。主体的に学習に取り組む態度を養うためには,児童生徒自身が自らの考えの変容やそれに至るプロセスを客観的に捉え,学習することの意義を感じたり,自己の感情や行動を統制したりすることができる力を育成していく必要がある。

(2) 課題解決的な学習を通じた資質・能力の育成

授業を通してこれまで述べてきた資質・能力を育成するためには,基礎的・基本的な知識・技能を活用した課題解決的な学習を重視するとともに,児童生徒が主体的・協働的に学ぶ学習が促されるよう工夫する必要がある。なぜなら,思考力・判断力・表現力等は児童生徒が課題解決に取り組む中で発揮することによって高まる資質・能力であり,個別の知識・技能は課題解決の文脈や状況に応じて組み合わせられたり,関連付けられたりしながら活用されることによって体系化が図られ,理解を伴った知識・技能として定着が図られていくものだからである。また,他者と

資料1-9 学校教育法が定める学力の三要素

学校教育法第30条

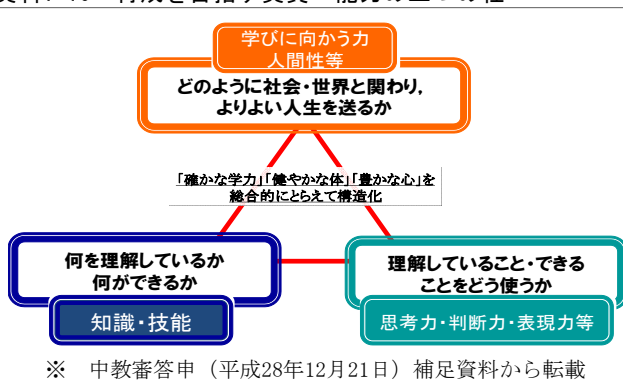
小学校における教育は,前条に規定する目的を実現するために必要な程度において第21条各号に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

2 前項の場合においては,生涯にわたり学習する基盤が培われるよう,基礎的な知識及び技能を習得させるとともに,これらを活用して課題を解決するために必要な思考力,判断力,表現力その他の能力をはぐくみ,主体的に学習に取り組む態度を養うことに,特に意を用いなければならない。

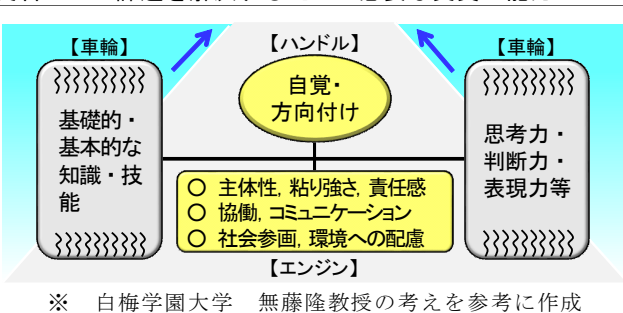
(下線は筆者による)

※ 第30条第2項は,中学校及び高等学校に準用

資料1-10 育成を目指す資質・能力の三つの柱



資料1-11 課題を解決するために必要な資質・能力



考えを比較・検討することによって互いの考えの相違点や共通点に気付き、そのことが問題意識を一層高めたり、自分の考えを見直し、新たな考えをつくり出したりすることにつながるなど、主体的な学習態度に関する能力の育成に好影響を与えることが期待できるからである。このような学習活動の充実は、学習指導要領においても重視されており、いずれの教科等においても思考力・判断力・表現力等の育成を目的とした学習活動として例示されている（資料1-12）。

そこで、このような課題解決的な学習を展開するに当たっては、どのような過程においてどのような資質・能力を重点的に育成するのかを明確にして授業に臨むために、表出させたい児童生徒の姿を資料1-13のように具体的に想定しておくことが重要である。その際、全国学力・学習状況調査等の分析を踏まえ、文章等から情報を正しく読み取ることや書いたり話したりするなど、表現を通して自分の考えを整理すること、考えの相互交流を通して自分の考えを多面的・多角的に検討すること、学習した過程や内容を振り返り自己の高まりを感じたり、次に生かすための改善点等を明確にしたりすることなどを特に大切にしたい。

資料1-12 学習指導要領における学習活動の例示

小学校及び中学校学習指導要領 第1章 総則 第4 2(2) 各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童(生徒)の興味・関心を生かし、自主的・自発的な学習が促されるよう工夫すること。					
	国語科	社会・地理歴史・公民科	算数・数学科	理科	外国語活動、外国語科
小学校	言語活動	問題解決的な学習	算数的活動	問題解決の活動	外国語による体験的なコミュニケーション活動
中学校	学習過程の明確化	課題追究的な学習	数学的活動	科学的に探究する学習	外国語による4技能にわたるコミュニケーション活動
高等学校		課題探究的な学習		探究的な学習活動	

資料1-13 課題解決的な学習^{*1}の過程における具体的な姿の例と資質・能力

学習過程 ^{*2}	具体的な姿の例	基礎的・基本的な知識・技能	思考力・判断力・表現力等	主体的な学習態度
課題の把握 (課題を見だし、追究意欲を高める)	・ 自ら対象に働き掛けたり、試行錯誤したりして、情報を収集することができる。	○ ^{*3}		○
	・ 既存の知識や経験と照らし合わせたり、友達の考えと比較したりして、課題を見いだすことができる。		○	○
	・ 見いだした疑問や課題を整理・焦点化するなどし、明確にすることができる。		○	
	・ 目標を自覚したり、学習する意義を見いだしたりすることができる。			○
情報の収集 (見通しをもって必要な情報を収集する)	・ 課題に対する予想や仮説を立て、検証方法を考えることができる。	○	○	
	・ 「整理・分析」に必要な情報を主体的に粘り強く収集しようとすることができる。			○
	・ 課題解決に必要な知識・技能を習得したり活用したりすることができる。	○	○	
整理・分析 (収集した情報を整理、分析する)	・ 情報や結果を目的に応じて図や表、グラフなどに整理・分類し、傾向や共通点、差異点を捉えることができる。	○	○	
	・ 自分の予想や仮説を見直し、必要に応じて修正したり、再度確かめたりすることができる。		○	○
まとめ・表現 (課題に対する考えをもち、適切に表現する)	・ 調べて得た事柄を基にして、自分の考えをもつことができる。	○	○	
	・ 自分の考えが相手に伝わるように、話し言葉や書き言葉で的確に述べることができる。	○	○	
	・ 自己の学習状況を振り返り、学んだことの価値や自己の高まり、今後の努力点等に気付くことができる。			○
	・ 実生活や実社会等へ適用して説明することができる。	○	○	○

*1 「課題解決的な学習」という表現は、「問題解決的な学習」と同義として用いている。

*2 学習過程は、総合的な学習の時間における探究的な学習の過程を参考にした。

*3 各過程において、特に発揮されていると思われる資質・能力に○を付けた。

4 授業において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか

(1) 課題設定の視点

前述した資質・能力を授業を通して育成するためには、児童生徒が主体的・協働的に課題解決に取り組む必要性を感じることができる課題の設定が重要である。そこで、主体的な学びを促すという側面からは資料1-14の**ア**に示すような課題を、協働的な学びを促すという側面からは**イ**に示すような課題の設定が必要であると考えられる。例えば、「知識・技能の活用を促す課題」は、既習の知識・技能を活用することによって、見通しをもって課題解決に取り組む、その過程を通して知識・技能を確かに習得することが期待できる。また、「情報を多面的に収集、検討する必要がある課題」は、複数の情報を比較・検討する中で根拠を明確にするなど、論理的、批判的な思考の発揮が期待できる。このように、児童生徒にもたらされる効果を明確にした上で、課題を設定することが大切である。

(2) 課題設定に当たって

前述のような課題を設定するためには、資料1-15に示すように単元の系統性やねらい、教材や題材の特性を十分に把握した上で、本単元で育成したい資質・能力を評価規準の設定を通して明確にする必要がある。その際は、児童生徒にとってその教材を学ぶ価値や楽しさは何か、また、どのようなつまづきが想定されるかを検討することが重要である。その上で、児童生徒が自ら課題を見いだす力を高めることができるよう、提示する事象や場面、課題発見のきっかけとなる活動の設定等を工夫する必要がある。また、学習を進める中で児童生徒が必然的にもつ問いを取り上げ、課題として焦点化することも考えられる（資料1-16）。いずれの場合も、全ての児童生徒が課題意識をもって主体的・協働的に学ぶことができる課題であるか、難易度も含めて十分に検討する必要がある。課題解決を通して、一人一人に深い理解を促すことのできる課題設定が求められる。

資料1-14 考えられる課題設定の視点

- ア 児童生徒が自分の事として受け止め、学習意欲を高めることができるような課題**
- (ア) 知識・技能の活用を促す課題（見通しをもった課題解決、知識・技能の確かな習得）
 - (イ) 実社会や実生活との関連について認識を深める課題（学習内容の価値の実感）
 - (ウ) 自分なりの考えを導き出す必要のある課題（自己決定、自己判断の必要性の実感）
- イ 児童生徒が学び合うことの意義を感じ、協働して解決する力を高めることができるような課題**
- (ア) 情報を多面的に収集、検討する必要がある課題（論理的、批判的な思考の発揮）
 - (イ) 考えを出し合い、グループの意見として集約する必要がある課題（協働する力、創造的に思考する力の発揮）

資料1-15 課題の設定例（概要）

例：小学校理科 第6学年「水溶液の性質」

単元の位置とねらい
5年「物の溶け方」→ **本単元** → 中1「水溶液」
水溶液の性質や働きについて考えをもつ。

教材の特性
・ 水溶液にはそれぞれ固有の性質があり、それらの性質を生活に利用している、など。

本単元で育成したい資質・能力（評価規準）

関心・意欲・態度	思考・表現	技能	知識・理解
興味・関心をもつて追究する。	推論しながら追究し、表現する。	実験器具を適切に用いて調べる。	水溶液は酸性、中性、アルカリ性に分けられる。

教師による事象提示や場面設定 ※単元末に設定

〇〇先生からの挑戦状
ラベルのついていない試験管の中には、塩酸、石灰水、アンモニア水、ミョウバン水が入っています。この中で、ミョウバン水はどれか見分けられますか。

※ミョウバン水は、未習の水溶液である。

児童が見いだした課題と、解決への見通し
正体不明の水溶液を見分けるには、どうすればよいのだろうか。
・ まず、ミョウバン水の性質を調べ、その結果を基にして見分けるといいのではないかな。

資料1-16 児童生徒の問いが連続、発展する展開の例

例：数学Ⅰ「三角比」、数学Ⅱ「三角関数」

直角三角形において、 $\sin 30^\circ$ について学習

生徒がもつ問い「 $\sin 120^\circ$ など、 90° 以上の角では $\sin$ の値はないのだろうか。」

課題
90° 以上180° 以下の角の $\sin$ をどのように定義したらよいか。

結論
半径 r の円周上の点 (x, y) をとり、 $\frac{y}{r}$ で $\sin$ を定義する。

生徒がもつ問い「 $\sin(-30^\circ)$ など、負の角では $\sin$ の値はないのだろうか。」

課題
負の角や180° よりも大きな角の $\sin$ をどのように定義したらよいか。

結論
角度に回転の向きと大きさを考えて $\sin$ を定義する。

5 児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か

(1) 実践上の課題を踏まえた工夫の視点

当課が実施した実態調査では、主体的・協働的に学ぶ学習は大切だと考えるが取り組ませることができていない理由として、ア.イ時間確保の困難さや学力差への対応の難しさ、エ.キ学力向上への懸念、オ.カ学習活動に必要な能力や態度の不足等を挙げる教員が多く見られた（資料1-17）。また、言語活動等の充実に当たっては、確かな成果が認められてきた一方で、活動の形骸化や希薄な議論など質的な深まりを欠く授業に陥ってはならないことが中教審等において指摘されている。

そこで、このような課題を踏まえ、次の三点から工夫することを提案する。

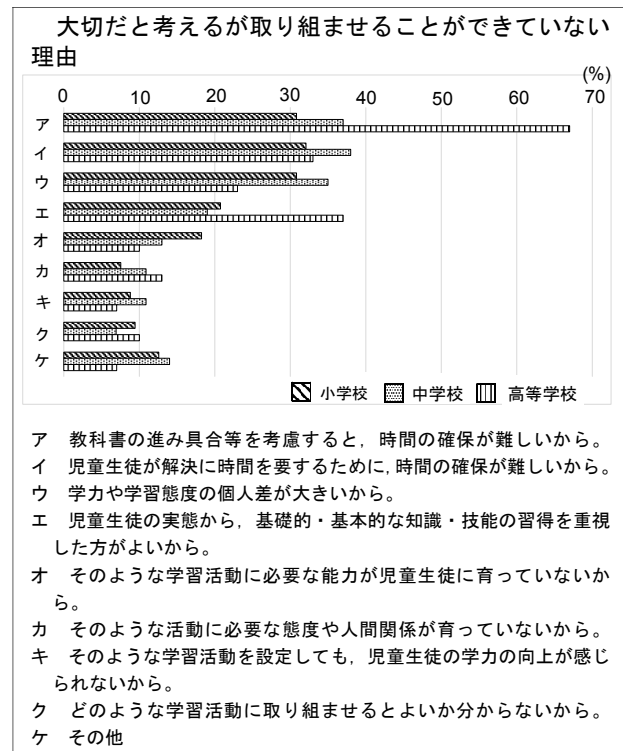
- ① 目標を踏まえた具体的な学習活動の設定
- ② 意図的、計画的な指導と評価の一体化
- ③ 自覚・方向付けを促す振り返りの充実

(2) 目標を踏まえた具体的な学習活動の設定

主体的・協働的に学ぶ学習を位置付けるに当たっては、言語活動の充実や、ペア又はグループ学習の推進、ICT及び外部人材の効果的な活用などが考えられるが、いずれの場合も単元や題材の目標を十分踏まえ、具体化を図る必要がある（資料1-18）。

そこで、授業においては、まず解決すべきことは何かといった目標を児童生徒に明確に捉えさせることが大切である。そして、何を手掛かりにどのように考え議論するのか、また、思考の過程や結果をどのように整理し表現させるのかを明確に捉えさせる必要がある。特に、グループで考えを集約させる場合は、個人にあらかじめ考えをもたせるとともに、どのような手順、方法で協議を進めるのかを明確にする必要がある。また、集団による学び合いが充実するためには、活動の意義や目的、ルールを共有させたり、相手意識のある話し方や聞き方を理解させたりしながら、実際の活動を通して互いに学び合い、高め合うことのできる人間関係を築いていくことが重要である（資料1-19）。

資料1-17 主体的・協働的に学ぶ学習の実践上の課題



資料1-18 言語活動の充実の視点と活動例

場面	視点	活動例
考えを深める場面	一人一人が自分の考えをもち、他者の考えとの共通点や相違点を意識しながら考えを深めていくような言語活動の充実	・ ペアやグループで意見を交換する。 ・ 付箋を用いて、考えを書き出したり整理したりしながら話し合う。 ・ ホワイトボードや模造紙を使って話し合う。
発表する場面	自分でまとめた事柄などについて説明したり、相手の立場や考えを互いに尊重して話し合ったりするような言語活動の充実	・ 調べたことや考えたことを説明する。 ・ 製作物を使って発表する（ポスターセッション）。 ・ 立場を決めて議論する。
書く場面	集めた情報を整理・分析し、論理的にまとめて表現するような言語活動の充実	・ レポートにまとめる。 ・ 新聞にまとめる。 ・ ICTを活用してまとめる。

※ 文部科学省「言語活動を通じた授業改善のイメージ例」を基に作成。

資料1-19 学習活動設定上の指導の要件と工夫例

指導の要件	工夫例
問題意識の焦点化	・ 図表等を用いた考えの可視化を通じた差異点、共通点の明確化
考える手掛かりや考え方の明確化	・ 手掛かりとなる情報（観察、実験や取材等の情報収集の結果、既習事項、教師が提供する資料等）の明確化 ・ 比較、関連付けを図る対象と着眼点の明確化
表現方法の明確化	・ ジグソー学習等による交流とまとめ ・ 図表を用いた考えの整理、集約
学び合う集団づくり	・ 学び合う意義や目的の共有 ・ 相手意識のある話し方や聞き方に関する理解の促進

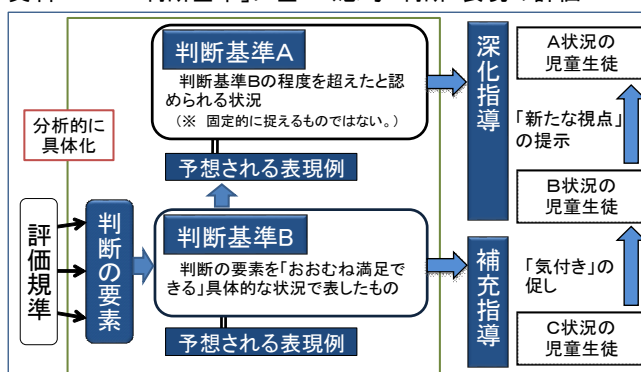
(3) 意図的、計画的な指導と評価の一体化

主体的・協働的に学ぶ学習の設定に当たっては、単元レベルで意図的・計画的に指導と評価の一体化を図ることが効果的である。そこで、単元の指導計画を立案する際に、目標を達成するためにはどの時間にどのような指導と評価を重点化するか検討する必要がある。そして、児童生徒が思考力・判断力・表現力等を発揮している様子を適切に評価し、指導に生かしたい。当センターではこれまで、児童生徒の思考や判断の結果が表現される「説明」や「論述」等の言語活動において、目標の達成状況を判断する具体的な尺度として、評価規準に基づいた「判断基準」の設定を提案してきた。主体的・協働的に学ぶ学習においても、思考・判断・表現の状況を的確に見取り、個に応じた補充指導や深化指導に生かすためには「判断基準」の設定が重要であると考えられる。その際、予想される表現例を「おおむね満足できる状況（B状況）」並びに「十分満足できる状況（A状況）」について想定することが、教材研究や授業中の指導と評価をより確かなものとするのである（資料1-20）。そこで、授業構想に当たっては、習得、活用を図る知識・技能を明確にした上で読み取りや解釈、説明などの思考・表現する活動を適切に位置付けたい（資料1-21）。

(4) 自覚・方向付けを促す振り返りの充実

自らの見通しに基づいて課題解決に取り組むと、その妥当性を検討し、判断する必要性が生じる。また、他者と協働して取り組むと、相手の反応により自分の考えのよさや不十分さに気づきやすくなる。このように、主体的・協働的に学ぶ学習には、自己の学習状況について自覚を促す働きがあると考えられる。そこで、より効果的なものとするために、振り返りを促す活動や働き掛けを重視したい。その際、今の自分の状態を知るだけでなく、これから自分はどのようにしていけばよいかを考えさせ、よりよい方向に自分を変えていこうとする力が高まるよう支援したい（資料1-22）。

資料1-20 「判断基準」に基づく思考・判断・表現の評価



資料1-21 主体的・協働的に学ぶ学習を位置付けた授業構想

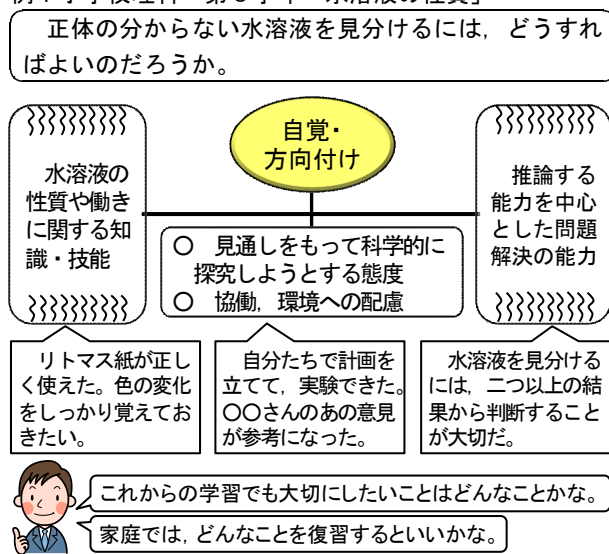
例：中学校社会科 第3学年「人権と共生社会」

課題解決のための主な学習活動の流れ		形態	主体的・協働的に学ぶ学習
導入 課題設定	「関心・意欲」の喚起 「憲法に社会権が規定されているのはなぜだろうか。」	一斉	読み取り 資料を基に生徒が設定。
展開 課題追究	「基礎的・基本的な知識」 ・社会権の種類 ① 生存権 ② 教育を受ける権利 ③ 勤労の権利 ④ 労働基本権 ・社会保障制度の充実	一斉・個	読み取り 教科書記述や憲法条文から生徒がリストアップ。
習得 活用	「資料活用」の技能 【資料】 ア 憲法第25条① イ 小学校入学の日の様子 ウ 生涯学習（料理教室）の様子、外	グループ	読み取り・解釈 資料から読み取った情報の意味を考察。
	「思考・表現」 資料を基に考え、説明する ・生存権等が定められている理由 ・社会保障制度の充実が必要な理由	グループ	解釈・説明 知識・技能を活用して説明し合う。
終末 課題解決	予想される生徒の表現例 「全ての社会権は、人々が人間らしく生きるために必要な権利であるから。」	個・一斉	説明 各自でまとめの案を作り全体へ説明。

このような表現に加えて、精神的、経済的に充実した生活の保障について言及している場合などは、A状況と判断できる。

資料1-22 育成したい資質・能力を踏まえた振り返りの視点

例：小学校理科 第6学年「水溶液の性質」



第2章 外国語活動、外国語科における考え方と実践例

1 外国語活動、外国語科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか

本教科等では、小・中・高を通じてコミュニケーション能力の育成を目指している(資料2-1)。そのため、外国語活動においては、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語への慣れ親しみ」、「言語や文化に関する気付き」を、外国語科においては、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現・理解の能力」、「言語や文化についての知識・理解」をバランスよく育むことが大切である。本教科等では、これらを「課題を解決するために必要な資質・能力」として捉え、学校教育法の示す学力の三要素との関連から資料2-2のように整理した。

課題解決に向けては、資料1-3に示す資質・能力の三つの柱を踏まえ、次の点に留意する。まず、「言語や文化に関する気付き」、「言語や文化についての知識・理解」については、単に習得を目指すものではなく、それらを用いて何ができるかが重要となる。また、「外国語への慣れ親しみ」、「外国語表現・理解の能力」については、必要な情報を把握するとともに知識・技能を活用しながら課題解決に向けて思考する力、課題解決に必要な情報や方法を選択したり、結論を出したりするために判断する力、伝える相手や状況に応じて表現する力として捉える必要がある。そして、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」については、主体的に学ぶ態度、学びに向かう力の育成に加えて、多様性を尊重し、互いのよさや考えを認め合う態度の育成に留意する必要がある。また、児童生徒が学習の意義を理解したり、その後の学びの方向付けを自ら行ったりすることができるようにするために、課題解決の過程を通して、自己の高まりや修正点を客観的に捉え、次の学びに生かす力を育むことも大切である。

資料2-3は、課題解決的な学習過程における児童生徒の姿と資質・能力との関連を例示したものである。指導に際しては、これを踏まえて指導計画の作成や、児童生徒への働き掛けを行いたい。

資料2-1 学習指導要領における外国語活動、外国語科の目標

【小学校学習指導要領（外国語活動）】

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

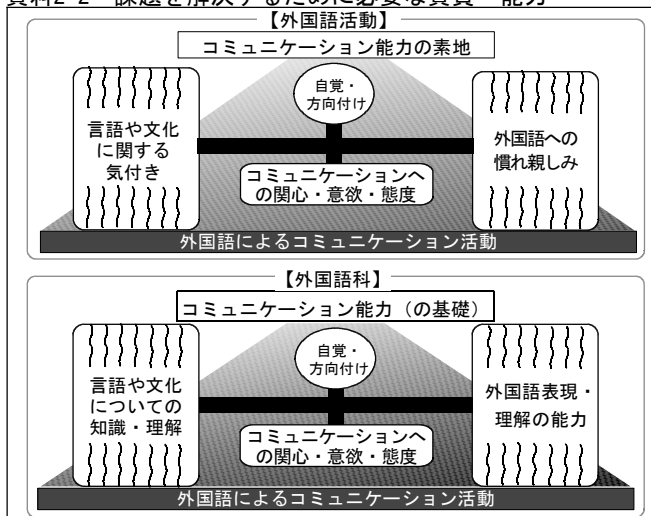
【中学校学習指導要領（外国語科）】

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

【高等学校学習指導要領（外国語科）】

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

資料2-2 課題を解決するために必要な資質・能力



資料2-3 課題解決的な学習の過程における具体的な児童生徒の姿の例

- ① 言語や文化についての知識・理解（言語や文化に関する気付き）
- ② 外国語表現の能力、外国語理解の能力（外国語への慣れ親しみ）
- ③ コミュニケーションへの関心・意欲・態度

学習過程	具体的な姿の例	①	②	③
課題把握	目的意識や相手意識をもち、必要な情報を収集することができる。	○		◎
	情報を整理、焦点化し、自ら課題を明確にすることができる。	○	◎	
	課題解決に必要な知識・技能を明確にすることができる。	◎		
	目標を自覚したり、学習する意義を見いだしたりすることができる。			◎
課題追究	課題解決に向けて、主体的に取り組むことができる。			◎
	課題解決に必要な新たな知識・技能を習得したり、既習の知識・技能とともに活用したりすることができる。	◎	◎	
	収集した情報を基に、目的や相手に即して自分なりの考えをもつことができる。		◎	○
	他者との意見交換等を通して、考えを広げたり、深めたりすることができる。		◎	◎
課題解決	自分の考えが相手に伝わるように、適切な語彙や表現を選択して話したり、書いたりすることができる。		◎	○
	自分の学習状況を振り返り、学んだことの価値や高まり、今後の努力点等に気付くことができる。			◎
	学習して身に付けたことを実生活に生かそうとすることができる。	○	○	◎

◎ 主に育成する資質・能力 ○ 付随して育成される資質・能力

2 外国語活動、外国語科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか

(1) 課題設定の視点

資料2-4は、必要な資質・能力を育成するための課題設定の視点を整理したものである。特に、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を育成する視点からは、児童生徒の興味・関心に即しており、解決したいという意欲を高め、主体的な取組を促す課題設定に努めたい。また、「外国語への慣れ親しみ」、「外国語表現・理解の能力」を育成する視点からは、慣れ親しんだ外国語の表現や、習得した言語材料を適切に用いた、ペアやグループによる活動や話し合いを通して、自分の考えを深めたり、修正したりできるような協働的な学びを促す課題設定に努めたい。さらに、「言語や文化に関する気付き」、「言語や文化についての知識・理解」を育む視点からは、英語と日本語の相違点を含んでいた、知識・技能の習得が活用を通して促されたりするような課題の設定に努めたい。

本教科等では、これまでもペア活動やグループ活動を積極的に取り入れているが、知識・技能の習得や個々の考えの一方的な表現にのみ焦点を当てたものにならないようにすることが重要である。課題設定の際は、発達の段階を考慮し、児童生徒が、課題解決に向かう過程で、満足感や成就感を味わいながら知識・技能を定着させることができるよう留意したい。

(2) 課題設定の手順

本教科等で育成を目指す資質・能力は、児童生徒がコミュニケーション場面で特定の表現を自ら適切に選択したり、活用したりする言語活動を通して高められる。したがって、課題設定に当たっては、資料2-5に示すように、単元の特性や、扱われる表現等に基づき評価規準を明確にした上で、単元終末時に目指す児童生徒の姿や活動を想定し、児童生徒が見いだす課題を設定することが大切である。このことにより、教師の働き掛けの視点が明確になり、指導を意図的、計画的に行うことができるからである。

資料2-4 課題解決のために必要な資質・能力の育成に資する課題設定の視点

資質・能力	課題設定の視点
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	- 児童生徒の興味・関心に即しており、解決したいという意欲を高めることができる。 - 児童生徒が自分と関係のあることとして捉えることができる。
外国語への慣れ親しみ (外国語活動)	- コミュニケーション活動を体験する中で、必要な語彙や表現を自然に繰り返して使う機会がある。 - 児童が慣れ親しんだ語彙や表現を、目的や相手に応じて適切に選択し発話することができる。 - ペアやグループでの活動や話し合いを通して、児童が自分の考えを広げたり、深めたり、修正したりすることができる。
外国語表現の能力 外国語理解の能力 (外国語科)	- 与えられた場面や情報を基に思考、判断したことを、英語で適切に話したり、書いたりするなどの、4技能を統合的に活用して課題を解決する過程を通して、思考力、判断力、表現力を総合的に向上させることができる。 - ペアやグループでの活動や話し合いを通して、生徒が自分の考えを広げたり、深めたり、修正したりすることができる。
言語や文化に関する気付き (外国語活動) 言語や文化についての知識・理解 (外国語科)	- 音声や基本的な表現、文化について、英語と日本語との類似点や相違点を含んでいる。 - 基礎的・基本的な知識・技能を活用する機会があり、課題を解決する過程を通してその習得が促進される。

資料2-5 単元における課題設定の手順例（外国語活動）

ねらいの把握 - 積極的に道を尋ねたり、道案内しようとしたりする。 - 目的地への行き方を尋ねたり説明したりする表現に慣れ親しむ。 - 英語と日本語とでは、建物の表し方が違うことに気付く。
表現や語彙、コミュニケーションの場面と働きの確認 （表現）Where is the school? Go straight. Turn right. など （語彙）park, flower shop, hospital, bookstore など （コミュニケーションの場面）道案内 （コミュニケーションの働き）相手の行動を促す
育成したい資質・能力に基づいた評価規準の確認 - 相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとしている。 - 建物の名前を言ったり、道案内のやり取りをしたりしている。 - 英語と日本語とでは、建物の表し方が違うことに気付いている。
目指す児童の姿の想定 慣れ親しんだ建物の語彙や道案内の表現を用いて、目的地に向かう場面のスキットを作成し、分かりやすく発表している。
児童に表現させたい発話例（モデルスキットとして提示） A: Oh, it's 10:00! Time sale! Time sale! Today, potato is 20 yen. Excuse me. Where is the vegetable section? B: Go straight and turn right. It's on your right. A: Thank you. (略)
教師による課題の提示と児童が見いだす課題 【教師】「場面や表現を工夫してスキットをつくらう」（5／5時間目） 【児童】どんな場面の対話にすればいいだろうか。 今の単元のどの表現をどのように使えばいいだろうか。 これまでに慣れ親しんだ他の表現で使えるものは何だろうか。 どのように表現すれば、見る人に理解してもらえるだろうか。
グループでの相互評価と児童が見いだす新たな課題 【児童】友達の発表のよいところは何だろうか。 友達の発表や意見の中で、自分たちに生かせることは何だろうか。

3 外国語活動、外国語科において児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か

(1) 目標を踏まえた活動を設定する視点

主体的・協働的に学ぶ学習が資質・能力を育成するものとなるためには、資料2-6のような視点に立った授業を展開する必要がある。

まず、主体的な学びについては、児童生徒にとって実生活との結び付きが強く、切実感のある課題に取り組ませることが大事である。特に、課題解決に向けた見通しをもたせたり、活動後の振り返りの場面で自分の成長を感じさせたりすることを大切にしたい。

次に、協働的な学びについては、児童生徒が互いに協力したり、助言したりする必然性のある課題に取り組ませたい。また、ペアやグループで、理解したことや表現したいことを伝え合い、助言し合うことで、自己の理解が深まったり、表現が豊かになったりする経験を積ませ、協働的に学ぶよさや必然性を感じさせることも効果的である。

(2) 意図的、計画的な指導と評価の一体化

本教科等における主体的・協働的に学ぶ学習は、児童生徒がコミュニケーションの場面で相手の思いや考えを的確に理解し、思考・判断したものを適切に表現する活動において最も効果を発揮するものである。当センターでは、このような活動で児童生徒が思考・判断し、表現したものを適切に評価し指導に生かすものとして、「判断の要素」(外国語活動)や「判断基準」(外国語科)を設定し、指導と評価の一体化を図ることの大切さについて提唱している。資料2-7は、中学校における「判断基準」と、想定される生徒の表現の例である。ここでは、特に、「おおむね満足できる状況(B状況)」並びに「十分満足できる状況(A状況)」の表現例を想定することに留意したい。このことにより、資質・能力の育成を図るとともに、教材研究や授業での働き掛け、評価の充実が期待できる。

資料2-6 主体的・協働的な学びを成立させる視点(例)

視点	教師の手立ての工夫
主体的な学びに関わること	・ 実生活との結び付きが強いなど、自分にとって切実であると感じられる課題に取り組ませる。 ・ 聞いたり読んだりした内容について思考・判断したことを表現するまでの過程を示したり、児童生徒自身に考えさせたりする。 ・ 課題解決に必要な語彙、表現やその習得の方法について示したり、生徒自身に考えさせたりする。 ・ 個人で語彙や表現を習得したり、自分なりに活用したりする機会を与える。 ・ 課題解決過程や身に付けた知識・技能について振り返らせ、自分の成長を感じさせる。
協働的な学びに関わること	・ 多岐にわたる情報について思考・判断し、目的や相手に応じて表現することが求められるような、一人では解決が容易ではない課題に取り組ませる。 ・ 聞いたり読んだりしたことを理解し、考えや意見、感想を述べたり書いたりするような、他者の多様な意見を取り入れることでよりよい解決に近づくことができる課題に取り組ませる。 ・ ペアやグループで、理解したことや表現したいと思っていることについて伝え合い、互いに助言できる機会を与える。 ・ ペアやグループで話し合う際の視点を、児童生徒同士で共有させる。

資料2-7 「判断基準」の設定と生徒の表現の例(中学校)

ねらいの把握 ・ 周りの生徒と協力して、自分の考えを話したり書いたりして、課題を解決しようとしている。 ・ 日本文化を紹介する英文を書いたり、書いた内容を基に話したりすることができる。 ・ 日本や外国の様々な家、自然環境やそこに住む人々の生活文化についての本文内容を理解することができる。 ・ 関係代名詞の意味、用法及び表現形式について理解している。			
表現、言語の使用場面と働きの確認 (表現) 関係代名詞 (言語の使用場面) 日本文化の紹介 (言語の働き) 情報を伝える			
育成したい資質・能力に基づいた評価規準の確認			
コミュニケーションへの関心・意欲・態度 ・ 言語活動への取組	外国語表現の能力 ・ 適切な発話 ・ 正確な音読 ・ 適切な音読 ・ 適切な筆記	外国語理解の能力 ・ 正確な聞き取り ・ 適切な聞き取り ・ 正確な読み取り ・ 適切な読み取り	言語や文化についての知識・理解 ・ 言語についての知識 ・ 文化についての知識
※ 評価規準の詳述は省略			
「判断の要素」の設定 ア 内容を基にした記述 ウ これまでの経験を基にした記述 オ 英文の量 イ 自分自身に関する記述 エ 既習事項の活用			
「判断基準」の設定 ア 外国人に日本文化を知ってもらうための説明をしている。自分自身のことについて述べている。 ウ 自分のこれまでの経験を基に日本文化を紹介している。 エ 自己紹介や日本文化紹介に使われる既習事項を活用している。 オ 8文以上の英文で述べている。			
目指す生徒の姿の想定 日本を訪れる予定のアメリカの知人のために、日本文化を説明するプレゼンテーションを作成し、ビデオレターで分かりやすく紹介している。			
生徒の表現例の想定			
【おおむね満足できる状況(B状況)】 Hello, I'm ○○. Thank you for your letter. I'm going to talk about toshikoshi-soba. This is noodles which is made with buckwheat. We eat toshikoshi-soba on New Year's Eve. Last year I made toshikoshi-soba. I enjoyed it very much. I hope to see you soon.			
【十分満足できる状況(A状況)】 Hello, I'm ○○. My hobby is watching movies. I like ○○ the best. Thank you for your letter. I'm going to talk about toshikoshi-soba which is made from buckwheat. We eat toshikoshi-soba on New Year's Eve with our family. Last year I made toshikoshi-soba with my mother. I enjoyed it very much. Why don't you try to make and eat toshikoshi-soba this New Year's Eve? I hope to see you soon.			

(3) 自覚・方向付けを促す振り返りの工夫

主体的・協働的に学ぶ学習は、児童生徒が自己の学習状況を自覚し、課題解決の途中や解決後の自己の学びを方向付けるものである必要がある。このことを踏まえ、本教科等においては、(2)で述べた「判断の要素」(外国語活動)や「判断基準」(外国語科)を児童生徒と共有することが効果的であると考ええる。「判断の要素」や「判断基準」は、教師側から示したり、あるいは、児童生徒にペアやグループで考えさせたり気付かせたりすることで、課題解決に向けた見通しをもたせるようにする。また、共有された「判断の要素」や「判断基準」は、言語活動の充実にも資することから、資料2-8に示すような視点に留意しながら児童生徒の活動の状況を把握し、指導助言を行うことが大切である。

振り返りの活動は、自己の高まりや修正点とともに、自己の変容につながったきっかけに気付かせる活動である。したがって、振り返りの活動においても、児童生徒には、「判断の要素」や「判断基準」を基に、ペアやグループでの活動のどの場面で、自分や他者のどのような思考や判断が自分の考えを深め、自己の成長につながったかを振り返らせ、次の学びに生かすような働き掛けを行うことが大切である。

資料2-9は、高等学校における、読んで理解した内容を基に自分の意見を含めて英文を書く活動の例である。本実践においては、本文の内容理解並びに表現活動のそれぞれの場面でペアやグループでの活動を行い、最終的に各グループで一つの作品を仕上げ、発表する活動を行っている。特に、表現活動におけるグループでの話し合いでは、「判断基準」の各項目に関する意見交換がなされ、表現を修正したり、新しい内容を書き加えたりする様子が見られた。このように、課題解決の見通しをもたせた上で学び合いが行われる場面を設定したり、振り返りの場面で相互評価を行わせたりすることで、課題解決に必要な資質・能力を高めるための活動を充実させることができる。

資料2-8 言語活動充実の視点と課題解決に向けた活動の例

場面	言語活動充実の視点	課題解決に向けた活動の例
考えを深める場面	一人一人が自分の考えをもち、他者の考えと共通点や相違点を意識しながら考えを深めていくこと	(外国語活動) ・ 課題解決に向けて表現したいことについて、自分なりの思いをもつ。 (外国語科) ・ 筆者やコミュニケーションの相手の考え等に応じた適切な表現について自分なりの考えをもつ。
発表する場面	自分でまとめた事柄などについて説明したり、相手の立場や考えを互いに尊重して話し合ったりすること	(外国語活動) ・ ペアやグループの表現のよさや改善点を、「判断の要素」の各項目に照らして述べ合う。 (外国語科) ・ 個人やペア、グループの表現のよさや改善点を、「判断基準」の各項目に照らして述べ合う。
表現を完成させる場面	集めた情報を整理・分析し、論理的にまとめて表現すること	(外国語活動) ・ グループ等で出された意見を踏まえて表現を完成させ、表現の仕方も工夫しながら発表する。 (外国語科) ・ グループ等で出された意見を踏まえて加筆修正を行い、英文の表現を完成させる。

資料2-9 主体的・協働的に学ぶ学習と振り返りの様子(高等学校)

課題：二重被爆の経験をもつ方の思いや夢を読み取り、それについて自分の考えを述べる。

目指す生徒の姿の想定

山口さんの経験や平和に対する思いや夢について、4人グループでの話し合いを通して要点をまとめ、自分の考えを含めて英文で表現している。

教師と生徒、生徒同士で共有した「判断基準」

ア 山口さんの夢とは何かを述べている。
イ それについて賛成か反対かを述べている。
ウ そう思う理由や意見を述べている。
エ 5文以上の英文で書いている。

教師が想定した英文

I think his dream was to make a world without nuclear weapons. I agree with him. The suffering in Hiroshima and Nagasaki should never happen again. I want all the people around the world to live in a peaceful world. We need no nuclear weapons.

生徒が個人で表現した英文

I agree with him. I hope that we never use and have atomic bombs, too. I want the world to be peaceful. And I pass on his dream to young people.

ペア・グループ活動で交わされる意見や助言(例)

- ・ 山口さんの考えをもう少し詳しく述べた方がよい。
- ・ 賛成の理由がはっきり伝わるようにした方がよい。
- ・ これから自分たちがどのように行動するかについても述べた方がよい。

話し合いによりグループで表現した英文

I think his dream was to convey the importance of peace to young people. I agree with him. Not only Japanese people but also people around the world should know about Hiroshima and Nagasaki. I hope that we should never have or use atomic bombs. I want the world to be peaceful.

本活動における振り返りの例

- ・ 山口さんの思いを深く読み取っていた〇〇さんの意見は参考になった。自分も文中の人物の思いを意識しながら英文を読むようにしていきたい。
- ・ 自分の書いた英文がグループの表現に生かされたが、〇〇君は先日習った表現をうまく使っていたので、今後はこのことも意識していきたい。

事例発表（1）

課題を解決するために必要な資質・能力を育成する授業に関する研究 ー第6学年「道案内のスキットを作成する活動」の実践を通してー

始良市立帖佐小学校
教諭 徳田 秀隆

1 研究実践の目的

本実践においては、主体的・協働的に学ぶ学習の工夫として、次の3点の工夫を行った。

一点目は、意欲を高める課題設定の工夫である。児童に単元の見通しをもたせるために、導入の段階で地域の身近な建物を取り上げて道案内のモデルスキットを提示することで、慣れ親しんだ英語を使って友達と協力しながらスキットを作ってみたいという意欲を高めた。

二点目は、指導と評価の一体化である。評価は、事前に想定した「判断の要素」に基づいて行った。そして、活動の中間評価として相互評価を行い、手本となる児童の活動を示し、よりよいコミュニケーションの図り方について気付かせ、再度活動に取り組ませた。また、中間評価の際は、児童の意見をホワイトボード等にまとめ、常に意識させるようにした。さらに、児童の困り感を把握して、個に応じた指導に生かすための手立てを行った。

三点目は、主体的・協働的な態度の育成である。ゲーム的な活動を計画的に行い、課題解決に必要な表現を繰り返し使う機会を確保した。そして、「自分の地図を完成させる」というタスクを与えることでコミュニケーションの必要性を感じさせ、相手意識をもって主体的に活動できるようにした。さらに、グループでロールプレイを行い、次時のスキットづくりにつなげた。

2 研究の実践（第6学年 単元名「道案内をしよう」）

(1) 単元の評価規準

観点	ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語への慣れ親しみ	ウ 言語や文化に関する気付き
児童の姿	道案内の場面で相手意識を持ち、自分なりの表現方法で積極的に道を尋ねたり、道案内をしたりしようとしている。	道案内の場面のやり取りで、これまでに慣れ親しんできた語や表現を、状況に応じて自分の意思で選んで発話している。	英語が語源になっている外来語が身の回りにはたくさんあることや、外来語と英語の発音の違いに気付いている。
判断の要素	① 自分なりに表現方法を工夫しようとしている主体性 ② 友達と協力して交流活動に参加している協働性	① これまでに慣れ親しんできた語や表現の使用 ② “Where is the ~?”などの道案内に関する語や表現の使用	① 外来語と英語の発音の相違点への気付き ② 英語を語源とする外来語が身の回りにあることへの気付き

(2) 単元の指導計画（全5時間） ※ 短学：短時間学習（朝の活動等で行う15分間の活動）

過程	次	活動内容	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫	評価の観点
わくわく	1	建物を表す英語を聞いたり話したりしよう。 チャンツ、カルタゲーム、マッチングゲーム	◎ 「道案内」をする場面のスキットを提示し、本単元の学習課題をつかませ、解決に向けた見通しをもたせる。 ○ チャンツでは建物を表す英語の語尾に着目させ、共通する音声ごとに分類し、言語への気付きを促す。	ア ウ
	短学	チャンツ、当てっこゲーム	○ 建物を表す英語を、自信をもって聞いたり話したりできるようにさせる。	イ
どきどき	2	方向を表す英語を聞いたり話したりしよう。 チャンツ、あっちむいてほいゲーム、プリーズゲーム、暗号ゲーム	○ プリーズゲームで、「相手の行動を促す」表現の“Go straight.”等に、体を動かしながら楽しく慣れ親しませる。 ○ 暗号ゲームでは、方向を表す表現を聞いて、具体物を操作しながら目的地にたどり着く活動を行い、必要な表現に十分に慣れ親しませる。	イ
	短学	チャンツ、ポイントゲーム	○ 方向を表す表現を、自信をもって聞いたり話したりできるようにさせる。	イ
	3（本時）	友達に分かりやすく道案内をしよう。 チャンツ、ポイントゲーム、インタビューゲーム、ロールプレイ	◎ インタビューゲームでは、インフォメーションギャップを利用したシートを用いて、コミュニケーションを図る必要性を感じさせる。また、よりよくコミュニケーションを図る視点を意識させるために中間評価を行う。	ア イ
	短学	チャンツ、マッピングゲーム	○ 道案内の表現を、自信をもって聞いたり話したりできるようにさせる。	イ

いきいき	4	場面を工夫して道案内スキットを作ろう。 スキットづくり (1) 場面設定・役割分担・練習 (2) アドバイスタイム (3) アドバンスタイム	◎ グループで簡単な道案内の場面を設定し、これまでの学習を生かしてスキットづくりに挑戦させる。 ◎ 作ったスキットをグループで相互に視聴し、互いに助言をさせる。その後、助言を基にして再度スキットづくりに取り組ませ、達成感を味わわせる。	アイ
	短学	1 チャンツ 2 スキットづくり	◎ 前時に作ったスキットを練り上げたり、新たに場面を付け加えたりさせる。	アイ
きらきら	5	場面や表現を工夫してスキットを作ろう。 スキットづくり (1) 場面設定・役割分担・練習 (2) アドバイスタイム (3) アドバンスタイム	◎ 多様な考えを持ってスキットづくりに取り組むことができるようにさせるために、学習形態を工夫する。 ◎ 相手に伝えるための表現方法として、言葉で伝えるだけでなく、「より分かりやすく」という視点を与え、ジェスチャー等を交えた表現ができるようにする。	アイ

(3) 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

過程	活動内容	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
わくわく(5)	1 挨拶 2 モデルスキット 3 めあて (Today's aim) 友達に分かりやすく道案内をしよう。	◎ 課題意識をもたせるために、うまく伝わっていない場面のモデルスキットを提示し、どうして伝わらなかったのかを考えさせ、課題の自覚化を図る。
どきどき(5)	4 チャンツ 建物を表す英語や道案内の表現を繰り返し聞いたり話したりしながら慣れ親しむ。	○ チャンツの形態を工夫し、建物を表す英語や道案内の表現に慣れ親しませる。 ○ 絵カードと文字を組み合わせ提示し、児童がコミュニケーション活動で困ったときに振り返る一つの手掛かりにさせる。
いきいき(30)	5 ポイントゲーム 建物の絵カードを用いて、建物までの道案内をしていく。 6 インタビューゲーム 自分のワークシートに載っていない建物や店の位置を友達にインタビューし、地図を完成させていく。 7 ロールプレイ グループで基本スキットの役割演技をする。	◎ ロールプレイに自信をもって取り組むことができるよう、ポイントゲームはグループ、インタビューゲームはペアで行うなど、学習形態を工夫する。 ◎ “Excuse me.” “Thank you.” などの表現を用い、「相手との関係を円滑にする」というコミュニケーションの働きを意識させるために、中間評価を行い、よりよいコミュニケーションの図り方に気付かせる。 ◎ 慣れ親しんだ道案内の表現を使って、グループで簡単な場面を設定してロールプレイをさせ、次時のスキットづくりにつなげる。
きんぎょ(5)	8 振り返り 9 挨拶	◎ 振り返りカードに感想を記入後、数名発表させ、互いの成長に気付かせる。また、チャレンジカードによる自己評価を行い、課題の自覚化を図る。

3 成果と課題

(1) 研究の成果

- ア 相手意識を高め、自分の考えや思いをよりよく伝えようとしたり、互いのよさを認め合う態度が育ってきた。
- イ 相互評価を通して、コミュニケーションの図り方に対して、友達に適切な助言を与えることができるようになってきた。
- ウ 中間評価や振り返りカードの実践により、自分のコミュニケーションの図り方に不足する点に気付き、ジェスチャーを入れたりするなど、質的向上を図ろうとする姿が見られた。

(2) 今後の課題

これまで以上に指導と評価の一体化を図るとともに、学習課題や学習形態の工夫や、活動内容や教師の発問の精選等を通して、児童の活動時間を十分に確保する必要がある。

事例発表（２）

課題を解決するために必要な資質・能力を育成する授業に関する研究 －第２学年「自分の夢について書く活動」の実践を通して－

薩摩川内市立川内南中学校
教諭 徳重 忠彦

1 研究実践の目的

本実践においては、まず、課題設定の工夫として、自分のことについて一度作成した英文を生かして表現させる取組を行った。生徒は、１学期に「自分の将来の夢」についての英文を作成している。そこで、その英文に新出の表現を加えたり、友達の助言を盛り込ませることで、自分のことについてより詳しく述べる英文を作成させることとした。

次に、指導と評価の一体化の工夫としては、判断基準Aの英文を想定して指導計画を作成した上で、「判断基準」を生徒と共有し、グループでの話し合いを通してA状況への到達を目指させた。

最後に、主体的・協働的な態度の育成の工夫としては、グループでの話し合いの充実を図った。そのために、まず、習熟度を考慮してグループ編制を行った。また、活動に先立ち、「判断基準」の各項目について生徒と確認し、どのようなことをどの程度書けばよいか、そして、どの視点について助言し合えばよいかを把握させた。

2 研究の実践（第２学年 単元名「Unit 4 Homestay in the United States(NEW HORIZON 2)」）

(1) 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
① 学習した表現を用いて、積極的に言語活動に取り組もうとしている。	① グループ内での助言を基に、自分がすべきこと等を具体的な英文で書くことができる。	① ホームステイでの問題と解決方法についての英文を読み、理解することができる。	① 新出の助動詞を用いた文の形・意味・用法を理解している。
② グループ内で積極的にコミュニケーションを図り、自分の意見に反映させようとしている。	② 伝えたい内容を整理し、まとまりのある英文を話したり、書いたりすることができる。		② mustとhave to, willとbe going toの違いを理解している。
③ 前単元の英文、教科書の本文や辞書等を用いて表現しようとしている。			

(2) 「判断基準」

評価規準（外国語表現の能力）	
将来の夢について、その実現に向けて必要なことを英語で書くことができる。	
尺度	判断基準
B	ア 就きたい職業とその理由について述べている。 イ 夢に対する友達の感想や助言を述べている。 ウ 助言を踏まえて自分に必要なことを述べている。 エ 助動詞等の既習事項を活用している。 オ 7文以上の英文で述べている。 My dream is to be an English teacher. I have two reasons. First, I like children. Second, I like English. My friends said, “You have to learn many things.” I want to go to America. I want to learn English there.
A	I want to be an English teacher in junior high school. I have two reasons. First, I like children. Second, I like to study English. So the job is perfect for me. My friends said, “You have to learn many other things.” So I started to read books. And I want to go to America to study English.

(3) 単元の指導計画（全8時間）

次	主な学習活動	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫	評価の観点
1	単元の学習課題確認 スキーマ形成 表現活動	◎ 単元の学習課題の解決に向けた見通しをもたせる。 ◎ 本単元の内容と前単元とのつながりを意識させる。 ◎ グループ内で互いの将来の夢への感想を述べ合う。	ア－① イ－①
2	新出単語の確認、本文の内容理解(4-1) have to の形・意味・用法の確認 表現活動	◎ 第1時の内容に加えて、夢に到達するためには何をしなければならないかについて互いに助言する。	ア－①③ ウ－① エ－①

3	新出単語の確認、本文の内容理解(4-2) will の形・意味・用法の確認 表現活動	第2時の助言を取り入れたらどのようなのかを、 will を用いて表現する。	アー② ウー① エー①②
4	新出単語の確認、本文の内容理解(4-3) must の形・意味・用法の確認 表現活動	第2時で助言された英文を基に、自分がしなければ ならないことを must を使い表現する。	アー② イー① ウー①
5	新出単語の確認、本文の内容理解(4-4) must not の形・意味・用法の確認 表現活動	◎ 教師との英問英答やグループでの活動を通して、 前時までの内容の定着を図る。	アー③ イー② ウー①
6		◎ 前時までの復習を基にして、グループで個々のま とまりのある英文を完成させる ・ 完成した英文の発表練習をする。	アー①③ イー②
7	復習テスト(発表、作文) Activity 1(4-5), リスニング	◎ グループ同士で発表する。 ・ まとまりのある英文を書く。	イー②
8	Activity 2(4-6), スピーキング ライティング	・ 家での決まりごとを伝え合う。	アー① エー①

(4) 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

過程	学習活動	生徒の活動	分	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
導入	1 挨拶	○ 英語で元よく挨拶する。	2	
	2 タスクの確認	○ 本時のタスクを把握する。 自分の将来の夢とそれを実現する ために必要なことを書こう。	3	
展開	3 授業の流れの 確認	○ 本時の授業の流れを把握する。	3	◎ 前時までの内容とともに、「判断基準」 の各項目を想起させ、文章の完成に向 けて見通しをもたせる。 ○ C状況にある生徒に指導を行う。 ◎ グループ内で英文をA状況に近付け るような助言を行わせる。 ◎ C状況にある生徒に対してグループ で助言を行わせる。 ○ 発表の際の留意点を確認し、聞き手 を意識した練習をさせる。 ○ 机間指導で発音やイントネーション等 を指導する。 ◎ 発表の仕方や英文の内容について助 言を行わせる。 ○ 各グループを巡回しながら、適切に 取り組んでいるかを観察する。
	4 個人での英文 作成	○ 前回までに作成した文を再構成し て完成する。	10	
	5 グループ活動	○ グループ内で英文を交換して互い に修正を行う。	10	
	6 個人での練習	○ 完成した文を暗唱する。	10	
	7 グループ活動	○ グループで発表練習を行う。	10	
終末	8 振り返り	○ 自己評価を行う。	2	◎ ワークシートに感想を記入させ、自 己の学習の状況を振り返らせる。 ○ 学習の見通しをもたせ、次時への学 習意欲を喚起する。
	9 挨拶	○ 次時の予告を聞く。		

3 成果と課題

(1) 研究の成果

ア 既にかいた英文を活用する課題を設定したことにより、意欲的に学習に臨む態度の育成と基本的な表現の定着を図ることができた。

イ 作成した英文に対して互いに助言を行わせたり、助言の内容を英文として盛り込ませたりする協働的な活動により、他者とのつながりを意識する生徒の姿が見られた。また、他者の考えを聞くことで、自分自身が気付いていなかったことに気付くことができた生徒もいた。

(2) 今後の課題

将来の職業について述べる活動は、キャリア教育の一環として行うことが可能である。学び合いの質を高めるためには、題材の特性に応じて、他教科等との連携を図る必要がある。

課題を解決するために必要な資質・能力を育成する授業に関する研究
－第1学年「職業に関するインタビュー」の実践を通して－

県立霧島高等学校
教諭 永山 愛子

1 研究実践の目的

外国語教育において育成すべき資質・能力は、外国語によるコミュニケーション能力である。外国語でのコミュニケーションを通じて他者の意見を聞き、そして自分の意見や考えを伝えることができる生徒を育成するために、本研究では、主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して、4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する授業の実践について研究することを目的としている。

授業においては、まず、生徒が英語を使う必要性を感じる課題や活動を設定することが不可欠であり、ペアやグループなどの協働的な活動を通して互いの意見や考えを比較・検討することにより、思考力・判断力・表現力を高めることができると思う。そこで、生徒が習得した知識・技能を活用して、生徒の思考・表現がどのように変容したかについて、「判断基準」の設定による評価を通して検証する。

2 研究の実践（第1学年 単元名「Lesson 6 Living as a Carpenter (COMET English Communication I)」）

(1) 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
授業において、自分の考えや意見を積極的に表現しようとする。また、他者の意見を聴こうとする。	① 本文の内容を簡潔にまとめて英語で表現することができる。 ② 職業に関するインタビューにおいて、場面や状況に応じた表現を使いながら、相手に尋ねたり、自分の意見を簡潔に話したり書いたりすることができる。	① 竹内さんが大工になった経緯や職業に対する考えや思いを読み取ることができる。 ② 職業に関するインタビューにおいて、相手の発言内容を理解することができる。	① 本文で使われている単語やその用法についての知識を身に付けている。 ② 受動態の文構造を理解している。 ③ 幾つかの職業において、就職する際に必要とされる資格等について理解している。

(2) 「判断基準」

評価規準（外国語表現の能力）	
本文の内容を基にした職業に関するインタビューのための原稿を作成することができる。	
尺度	判断基準
B	ア 相手がその職業を選択した理由や必要とされる資格等について尋ねている。 イ 相手が答えやすいように質問する順序などの工夫をしている。 ウ 自己紹介などの始めの部分や結びの部分などの文章を書いている。 エ 教科書の内容を参考にし、5文以上の質問文を書いている。 Hello, My name is ○○. We want to ask you some questions about your job. Why did you decide to be a □□? What kind of qualification do you need? How was your job at first? What is important for □□? How do you like your job now? We are looking forward to receiving your email soon. Bye.
A	Hello, △△. My name is ○○ and we are Kirishima Senior High School students. We would like to ask some questions about your job. First, when did you decide to be a □□? We are now thinking about our job in the future. Second, how was your job at first? Did you do your work well? Lastly, when do you feel happy as a □□? We hope you will send us email as soon as possible. Good bye.

(3) 単元の指導計画（全9時間）

時間	主な学習活動	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫	評価の観点
1	Introduction, Signposting Questions and new words 課題の確認、単元及びPart 1の概要把握	竹内さんへのインタビューの概要を簡単な英語によるQ&Aで把握し、見通しをもたせる。	ア エー③
2	Comprehension 新出単語の確認、本文の内容理解(1)	◎ 精読・音読練習を行い、グループ活動を通して内容理解を深める。	ウー①② エー②
3	Review, Signposting Questions and new words Part 1の復習、Part 2の概要把握	◎ 本文についてペアでretelling活動を行う。 ・ 職業について竹内さんが思っていることの概要を簡単な英語によるQ&Aで把握し、見通しをもたせる。	イー①

7	Job Interview (1) A L T の友人紹介, グループ活動での原稿作成	◎ A L T の友人に関する情報を英語で聞き, 彼らの仕事に関するインタビューで質問したい事項をグループで話し合い, 原稿を作成する。	アイ②
8	Job Interview (2) 原稿作成, 相互評価による修正, ビデオ撮影	◎ グループごとに作成したインタビュー原稿を発表した後, 相互評価を基に改善し, 原稿を完成させる。 ・ ビデオに録画し, メールで送信する。	アイ③
9	Job Interview (3) 返信されたビデオの鑑賞, 振り返り	返信された映像を通して情報を聞き取りながら, Job Interview について振り返る。	アイ③

(4) 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

過程	学習活動	生徒の活動	分	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
導入	1 挨拶		2	
	2 タスクの確認	○ 本時のタスクを把握する。 様々な職業を知るために Interview 映像を作成しよう。	3	
展開	3 授業の流れの確認	○ 本時の授業の流れを把握する。	3	◎ 知りたい情報を得るために作成する原稿を「判断基準」を確認しながら, 完成に向けて見通しをもたせる。
	4 リハーサル①	○ 前回までに作成した原稿をグループ内で共有し, インタビューする内容を確認, 練習する。	5	◎ C 状況にある生徒に対してグループで助言を行わせる。 ◎ 相手が質問に答えやすくするための工夫を考えさせるなど, 英文を A 状況に近付けるように助言を行う。
	5 プレ発表	○ 各グループの質問事項を聞いて相互評価する。必要があれば英文を修正・改善する。	10	◎ 相互評価を受けて, よりよいインタビューにするために必要なことをグループで考えさせる。
	6 リハーサル②	○ 推敲した原稿を基に練習する。	5	○ 発表の際の留意点を確認し, 聞き手を意識した練習をさせる。 ○ 机間指導で発音やイントネーション等を指導する。
	7 ビデオ撮影	○ グループごとに撮影する。	12	○ 各グループを巡回しながら, 適切に評価を行う。
終末	8 振り返り	○ 自己評価シートで本時の活動を振り返る。 ○ 次時の予告を聞く。	8	◎ One Page Portfolio (以下, OPPシート) を使用し, 検討段階ごとに作成した英文を振り返らせる。
	9 挨拶		2	○ 学習の見通しをもたせ, 次時への学習意欲を喚起する。

3 成果と課題

(1) 研究の成果

ア 生徒の職業選択という身近な学習課題を設定できたことや, A L T が来日前に就いていた実在する職業についてインタビューするという, 英語使用の必要性を感じさせることができたことで, 生徒が主体的に学習しようとする意欲を高めることができた。

イ 判断基準 B を踏まえた上で, 「どのようにすれば, 自分の言いたいことが相手にもっと伝わりやすくなるか。」ということを考えさせたことにより, 相手意識をもった意見や話し方を考え, 表現しようとする生徒が増えた。

ウ OPPシートの活用により, 自らの英語での表現力の高まりに気付かせることができた。また, 相互評価により, グループ内の活動が活性化し, 「もっとうまくできるようになるにはどうしたらよいか」について一人一人が考えるようになった。

(2) 今後の課題

身近な話題と結び付けながら, 生徒が主体的・協働的に解決に取り組める課題設定の在り方について研究を継続する必要がある。また, 中・長期的な視点から生徒が自らのコミュニケーション能力の高まりを段階的に自覚できるような指導の在り方についても工夫していく必要がある。